俳諧文庫　十六

へ 5
6660

へ5
6660
門 へ五
號 4349
除 籍
〈2002-49〉

月花ハさらに緑をあつむるまてハ種々おほせのさてもあるの
あつく能誹諧ハ歌の一種なりて既に先哲も此道の
之語ハ是に相ハ花鳥の外に此心動かし秋の夕を
月に思ひのまゝ志ゆゑの人とさへ見るもの前よりふ
感しぬるをいひ出し花を雪にたとへ人のまた落ちけるに
いまた分かたし田舎もほかにしるしあらはし白雲の緒出す
ものしいふへきなかよきのいさゝか此道に遊者菊雪
園の主志ゆゑ雪の曲水上にあそひ詞を月雪の名にた

こゝろよく所謂俳諧の千変万化しぬる處に其
品わけの詠とりて槻弓集と號しまことにこれ
梓にちりばめ槻弓品々をわかちしかる古人の語と
すてゝ名をやつれたるあつく此集の始に今の廿編とあるの
その家に年々人をえて序言をかたらしめたる手にあれ
この書へまにいかれは笑てあへてとるみちのふあむ

元祿元甲子のとし

梨節

槻弓集二十編

獨吟

春は三ツの櫓に吹ぬるれは　不見

東風の海しねつて又秋夜　見分

遠山旅足をふ草雑路志あるし　見

婦ら里の山のうた婦人十旁　分

月ともしをきて張有き角の面　見

桜の木たてのうんを赤してむ　分

山雀は追ひかけても夢の種　兄
夜あらしの音は佗しき宮嵩　孫
鹿鳴の森は静かに引かへ　兄
栗おちて紅葉の錦手おもしろむ　孫
観月の掟は杖を頼まれし　兄
関東へ金杖は持して森入ける　孫
涼風は静かに谷の月もよし　兄
打よりて老のしのぎ秋のさかひ歌　孫

天秤につりし新酒をためしけり　兄
百万遍の会はされけりませ　孫
黄ばみたる比叡山の尾花に風あり　兄
妻は無分別　書きかの　孫
かさ山の若葉打つ竹の旅姿を嗅ぐ　兄
今朝は兄弟は多く鎌倉　孫
婚つとめ奉仕をする御好き　兄
よろしさとて悪の仏口　孫

蝶なしに須磨の名あらはれ　舟
鶴まれに踊る雲は薄墨　兄
帝王の古事をやかましく歌ふ　舟
猫この年寄の長咄しする　兄
過ぎたる馬は路あやまつ　舟
火のつきたる檜のこの香の酒　兄
めしくしく三夜の月見を済し　舟
松茸狩を始めてにけり　兄

長袖の長袖始めぬやうにまで　舟
泣出す新嫁つつ懸雪の子　兄
昼のうちに八丈の霧の魚問屋　舟
鶏が鳴く居なしも乞食の夢　兄
稲荷の杉はとうとう咲きにけり　舟
国を出し笠を祝はれしき集　兄

あるゝ日もまだはれぬ様この比　素民

柴垣多き里のうそ寒み　松朗

てゝのりに汐干疲の貝拾ふ　見外

家鴨抔ろしく尾を媚つて来る　民

涼燈の中を漕んで昇る月　朗

叱て縁きれて見ぬ夜の酒なり　外

吹かゝる舟の帚宗よ張替る　民

本虫の傳にまかふ数多學　朗

喰ひのこしたる寛永の旅の留守　外

秋き祢たる女冬の海苔掻　民

高倍よ柳四五本枯よ成り　朗

禎報を朽園よ想嫁さまよまかる　外

あさしくもさやき合の喪山自　民

まつ異の河さみ芋の皮むきて　朗

下手作と呼れし秋や今年 分

後ちらくちて人もまゐる 民

西掛いちとゆふ帯刀はとさえ 訥

うつろかいつこたもと秋山路 分

彼岸過寺の無音を云ひ詫び 民

木蘭羽織に似しくしらす 訥

伯父甥の中に遠慮もなき女房 分

影まいのまへにかかりてつくしまし 民

新町へ嫁しもはつる霜夜哉 訥

洛外よりの古き菖蒲酒殊に臭 分

手負さへ保養の為の捨骨折 民

卒にも年の名と気患あり 訥

法蔵のきさらぎ隠居枝指 分

案を分ても八朔の漂ひなる 民

名月の夜八打のち宮くさり 訥

須磨にあかきいつの秋路山崖 分

堂ものゝも飛ちりつめ赤蜻蛉　民
樸多く雑子催ハまへて妙に清く　朗
見物つゝ志ゆふ子能きを陰つ照し　分
まろき月鳥ハ立めぐ白き幡　民
声つ東野菜雑木下の葉黄緑く　分
雲も除生まれ野らまよ流立ちる　朗

雨乱し流き夜ふさまし猫居る　見外
立居まつ手出て陰こゝろ花自　苔山
桃生路是びの御まさ地を映し　外
わらひ雑こゝろけ夜の毛小色　山
手洗に古衣ハ湖の迦し　外
若やも月夜中に八鳥の消えつる　山

咲ちるも咲揃ふたる梅さかし　外

世間さへ人のあはれき戦場　山

旅にあるまゝ妓婦のつれ出し帰る　外

秋千しよ志さる足代家の志め深き　山

乙ゝ雲の来きるはしたて八嘆より　外

風鈴常根八寺もとの里あり　山

深への家に歌葉の多き取り坂　外

足もしゐる把鬱おの自　山

又しをも新酒の酔ホ頭よの浮り　外

おもきまちに起きさふききの浮舞節　山

隙上す文婦る足の浮きしくと　外

汐干のこうの礫の多奴さする　上

妻ふしゆきのかとなるハうらこさき　丶

茶の湯ゝ能きゝ一節切婦く　外

太坂と京の手合のはなる薬さる　山

入院披露の園輪ゆめさする　外

根上りの松涼しき水の見の辺なり　山
まちまちかへてさえ下駄の音　外
廿五の花は大仏殿護摩参り　山
京より白の奉加に自駄賃　外
人の妻を世話やく老のうき世　山
鶏の汁まはり鉢を嫁にまかく　外
申刻より月見る夜となりし里　山
星まちて扇をまねく来る　外

春のころさえて念仏の声出来　山
菜の花は御開帳とさかやる座供して　外
つれ合は醉しぬきての寒念仏　山
似よりもの昔は雛の豆煎　外
里人の往来も茶の煙なり　山
鶏よおどろく露も鐘の音　外

〻やこゝろ出る名月嬉し川手水　見外

出たかし秋米の字をかり何と　其彭

雲霧當新畫りを出代りを　外

菊をたきまとめたる文咄しける　彭

面々のかの井まも志ん外小春浮　外

かしこる鶉の上もま葬しふ蓍　彭

一錦のうめん何ことも蓍のいものぬる　京 鋤柳

黄昏や臣刑をまきの社魔の回　米吾

〻光りもの栗木の芽を乗まなり　公臧

〻妻めくや秋かうきまとるの絵　浅菖

〻思ましの田も詠つゝや夕涼め　秀父

〻蘭名をしく味としあふ妃世面々の弟　古人 梅亀

ミ 初日ハ夢のさめけり清水にも　京 芥舎

ミミ 嵯峨釈迦や昔はさのみまゝならぬ　十二八 畊左

汐時よし学紙番や吹くさ治　如雲

遠山やいつとしもなく焼いたより　無蘇

歳旦や蓬莱飾らぬも志の足　栗操

ミ 濱松や隠る年中寄り嘉る　素蓋

ヽ 無常や面白き山の車遊　廿五七 韓左

ミ 菊を見る人の物語しや夕あかり　兵庫 隆谷

ミ 清水寺嶺をしもしてころま月　近江 丸峯

蓬莱の角ふつふびや端年　六门

萩きるや咲くへかまし松の影　伊賀 以雄

ヽ 汐赤や温泉つくる中島旅かり　忍吏

ヽ 積ちる秋や白く如く山の峰雲　伊勢 北芥

ミ 松蔭や清く鶯当に返　薫田

ヽ 様るの花松こえて春の風　文甫

ヽ 面より八さきへ傾るも紫荻　鼓秀

莫寄もなしとや藪挿し[illegible]　原牧 西后

榛の木の八條を仕舞ふ藤の花　一清

福寿草や明るくしても室の花　梅程

寒き日や内は[illegible]人形数　素濱

五月雨や備後見る牡丹かな　不匹

あつ国や里の夕顔は[illegible]　三楼

枯芦やふしみは[illegible]の夕かな　東述

ほとゝぎす[illegible]　静雲

去年よりも信濃の雪や月の朝　筆蝉

上野の花も[illegible]車の[illegible]　士芳

[illegible]鶯の[illegible]宿の春　英陰 山士

橋[illegible]の自　三右 定位

[illegible]や[illegible]人[illegible]　東芝

[illegible]八[illegible]　蓬宇

木兎や[illegible]耳[illegible]　近江 学生

立秋[illegible]　杜水

西日やら人宵月松にくれの朶　備后 九成

稲そよぐかくて見えける方の田まみれり　甲斐 梨許

早くも嘴雲雀の声や夕ぐれり　壽村

菜の花に蝶来る影に其の物　素之

折りぬめる立秋にて月見の首　一瓜

ヽヽ抽の声く風の来ぬれりきの林　蓮宝

一露の窓にうつる姫君の文安心　不争

木の葉散るも松きの声の暮るる　家光

無性に見えて面の月も嫌ふ名　圭芸

蝶しらや花より姥子の鼻の先　魯宀

涼し酒は時よりまくれり沖鴫　南海

名月や常より見ゆる物の影　露石

秋の宵摂摩の留守や夜の物　よその雪

秋の色や此夜霧屋に人の影　潮自

稲の陰とまりて露はりこの月　柳卿

ヽヽ山葉の木や家合垣松の影参　松自

妬咲て嘩そ並ぶ軒の蝶　甲斐 里星

藤は野にあふて見るめしき雲の花　雨自

鶯くの聲も花さく若葉に　杉夕

夢見ては月ハめてたや十五夜　一つ鶴

いね実の美をまた婦々鶯も蒲に　[illegible] 旭松

聡の水よ淡もちらしや猪の露　標堂

髪も見え月を見ぬ宵の名残に　一楽女

親舟詩霰竹寞ふかくなりけり　賀山

風の音よふさよ家や遠ざかれ　[illegible] 松自

喜色の楷は春秋子の生れけり　一楽

幸ひに畑田やすらひさらに秋の花　多笑

名月や我身口をきく萩の声　六蕉

ありし涼しき人静かなりけり　泰堂

藤さへ今年は都を恋ふ奴の花　三擲

菖蒲の露も菖蒲は風呂への湯なり　松鶯

雨降る夜つとよ紫陽花の日よ下の夕　五清

梅かゝや客ハ客なりけり雛ハ雛　東武 蕉似

つく／＼と春も更行蝶の夢　如行

足薪や一把ともゆる春の末　武蔵 春山

すゞしさや水も流るゝ苗田への形　子賀

見るうちに生まれて露に菖蒲哉　一雪

手ならひ畑のまつりやいつもし　無欲女

見返して眠に驚しや庭桜　菊蕉

稲雀や水に影うつす春の色　自雄

氷とけて木のしげりに水への花　雪和

散りて雪かとも八重の咲や初桜　其自

この子さへ小魚釣人ハ花の影　桃窗

水鳥の見えぬも春やたゞの山　柳山

咲出たるしの雛に出る錦にし　静逸

散も梅ハ嬉しやうれしさのひとつの花　一傑

咲返る風に雛ふる春田への形　原水

よし雉や内輪あくのうち我　是仏

蝸牛よき時は角出す端午　武蔵　子曽

起しや景の男をかゝはる　一好

鵜松や海の月沸る隈の船　支ゝ

山人の藤を帰るし秋野川　支枝

さのみにはれの市立ありき柳かな　豆人

形すまん方へ雨ふる小舟の夜　素栄

白は雲にはきはゆき空の月のかげ　一力

旅人の手箱は道を越ての春　安川

あんおるや雲出る人の秋ぞ　涼菊

松の杉はよき所あるしや芦の橋　左律

箱引や浮名立つる雨りもの　犀花

萬よりは咲く茶る梅の手枕　要玉

手水つきは何の女も成る牡丹の花　卜仙

星うるむ空やぐさまは葉のこる　文雉

田わけ泥の稲も流る暑いの水　里山

昨夜あしし秋細めぐるの二人連　後老

晴きつた僅し便埼の天龍川　武蔵 三菓

はしま菊さし語めて石戻りゆ　保円

風籟の古郷て又海青田の丸　介壽

顔のまゝ魚の峰なり叔のよしり　其考

魚されの料理越ひしあめ冬星　墨井

和の穴雑わすな嶮山の凹（ホラ）　剣菾

曽ころや花出何のちよう何し　其彰

此の秋は西自し仕や拭掃除　上総 金陵

菜畑や土岩つたふの蝕上り　蓮丈

よそみしに屋蕗八重形その水　薬舟

大嶋は里の流石に落さり冬星　峰雲

時鳥何との上枝月残の露　月松

此々山杉の茶花雲り楚葉の木畑　孝甫

蕎餅や蕎つきあうに座に肉　遊舟

新月や新ひて雲に笑し記　雲一

古くさの月叔の夜の槙木市　一瓢

おのつから方に向や春の緑　下総 以兄
蚊帳ハ水鶏にもよし寝水鶏　香舎
葉かけ水余りも大やうに牡丹かな　一雄
婦しくて如意青河の山の水　酒篇
光陰に借ハあら程と鳥か音　一咲
うへ木あまき樹と雲や鶉かの丘　山慶
陽炎や鷲の居眠る岩か上　還豊
春の松魚庵か春にまる英しき　嶌雄

山形りに松葉かろきや蚤の声　兄斉
撫のうちをさまちらさくら峰　藤居
茶摘歌手前の前に恋ましさ　斉
嫁ましくて捨る風呂蕨の薹　居
田からる田の新縁萌まても夢の自　斉
蹄洗衣を着移るて申しく　居

古寺のかき添よ出る札の辻　分
名残しく多能む宝の玉傳ふ　岳
無申ほまよ放埓者と指さ遂　分
雲扇婦りく挟ちく婦しつく　岳
月影つらく昨ろ古国の野ゑく　分
花のりよかきもとく夕舗湯とふ　岳
出かへし自のさし出　二階口　分
秋ハ番宿の挟ちら宿り河る　岳

寄る臺に十方よくちく輪細　分
眠さく扉くいつき寺子ちる　岳
山路よ咲きつ花のさくえら遂　分
春ゝ器をの遊びのあるぬ雀子　岳
彼岸こらう花能富清よ手の般若　〻
まつらぬ海よまいきとあり　分
湯泉の旅をる舩の森よ吉る宜　岳
最中にかく花名能着經　分

はつしもの寒衣　西に京兆卿ゝ　孫

雲にはしき詠は白きさらに婦る　分

春菜ハ扇の古私をとゝめし錢　孫

見まかせつゝ身は世辞　分

手のうちは我まゝ行くの比とをくり　孫

酒をのまぬりに宿ハ松たる　分

初月に東雅の魔は名の海きさ　孫

錢むしれんゝの皇んしく帰　分

茶粥の味をかはゆ申に飯食ふ　孫

尊子は古語に安心ハめ以上　分

世は神を思ひ志まかりつきあたる　孫

春のりつ茶の林色久能消　分

はなみの茶を随に花ちる西向き　孫

深山桜の紫に色香　分

志らしぬ梅ま近きの他人は　兄舟

春のかすみまちぬる舟に河もかし　よ雪

深緑の草霞も華の筆を持ちて　舟

青き一合の海にかすむ浪に　雪

鶴声ハ何處ぞも柳陰の筋見え　舟

籠寒き塩をも暗しの嵐に七　雪

津々浦の秋の錦を見つ立　舟

葉々も紅葉々河かへる拭　雪

船の窓ハちん船出掃に沖人小屋　舟

踏まて影りまひへ豆良　雪

昭々の志りしてさのえ二回老　舟

織料種やつてかてのふ　雪

面河しの海をたれて驚の自　舟

萩も若めのこの揺ちの花　雪

惚れて身をまかせる出世 舟
桐の中よりは親子の[illegible]らし 雪
裸坊の[illegible]まへ中する 叔父色 舟
[illegible]ちる帰る引鶴 雪
家ちよみ[illegible]苗代の[illegible]くもる [illegible]
[illegible]しる餅を葉分 舟
[illegible]色は[illegible]永き[illegible]大工 雪
絵書[illegible]の[illegible]しる[illegible] 舟

恵山は雪[illegible]見申す[illegible] 雪
[illegible]嫁[illegible]の[illegible] 舟
[illegible]の筆を[illegible]道 雪
[illegible]は[illegible]中[illegible] 舟
御[illegible]色を[illegible] 雪
よし[illegible]路 舟
[illegible]の入[illegible]涼風[illegible] 雪
[illegible]田[illegible]中しる 蘭田の刈跡 祭

二三里の旅してや庭も鴻出し　古

十日ほどりまくさ鶴の手助国　丹

買弟て雛をほめし節星立　古

古右の窓ぶうら咲のうちこ　丹

船で来て西へハ戻る人丸忌　古

終日の兄つ事て鶴鶴に寄る　丹

希路子や手帳へとめる垣の外　下毛 与総古

古くらよく鶏棒をさげる妻路哉　聴長

本店の帳ときすらう店お流し　浮富

真明ことまつ松ハ行中てこや時鳥　古彦

来る人ハむすま涼む浮の寛あら　来賞

山吹やら烏羽て垣にむかのうち　志翠

売人よう兄人のゆさむや雛の市　子晩

聖の作り松ハ去かひて妻路自　萬岳

象の付奴入梅さへ共にの事　下毛 松風
水鳥の賊きや隠し所なりけり　蕉雪
さゝらし色や当茶の花ぞるけむ見　可笛
綿ぬれて請けまさるや時雨　非江
雛祭ハ大きなるおりふし傍らるゝ　出牛女
早乙女の往還忙さえ小豆の丸　桜多
きぬぎぬるハ一天こゝろ小雲ゝ　里静
親と子のしゐみ出せし行精進部　季京

野かたる町や海渡ムラ海見申ま　猴鹿
手拭かけの掛ぬける早乙女田植らし　宮本
茶の花や聖まちかけの古中婦道　壹遊
当代の花四月ゝ久門田ゝの雛　里壹
初き出れる年男年天を泳なり　遙水
文梅ん屋おりふし轟く萱森　静麿
汲あかる井戸の嬉や西ゆるし　而柳
都よりいふんて古きの水を流る　其翼

水口を登りや海ハ春の月　篁竹

明の河へ橋姫こえて栗さかす　竹自

まつりや雲は引しこと東吹　仲之

あらしや雲ハゆるより明の夷　文蕉

知ら住河かる波めやたちろかゝの文　入谷

蓄くの手のとより秋ハ来にけり　園生

妹まつハ姉のとかりるま春の山　弘潤

雪の春秋寺まつや田の餘　梅谿

鶯声く上手めのしこ踊ゝの形　笛舟

祢よ月をてつき何を好ミしる名　東雲

打捨し身の一日もあさきゝ霧ゝの乱　甫

木つきや其ミ身をかさせ松林　木谷

間送くる家栖ん申る幟ゝの里　玉英

帰るもや彩ひ帝るる秋の深り　嫩石

足まるの芦味やしし末落てる　菊舟

末ハ蓬なる白ゝの形住てる栄香心　崑松

神松の森多に茂し家宮ゟ　一瓢

人真似に植ても菊し庵の菊　佳山

樵にきれても身のかへり尾花ゟ　卯兮

休む場をゆつる髪結ても暑の松　鶴雄

下駄の音さへ月見先生の柳への外　要堂

鏡の中つる月を襟てもちる男ゟ　呆雄

人到て居よろり妻の山鵲　一桂

魚夕や身を清むる八汲の水すく　和旦

名捨てたあしぬ昔人のみ念ゟ　玉窓

あらさとの香も家に住めりまかり　義桂

如れしき松の咲かよりまての山　嘉坊

うしろや保養にもうけ神楽り　鶴遊

嬉しさの月に餘りて光陰華　玉桂

黄昏に出る八咲かる青曲ゟ　士道

枝やりはしほ柳家のちくさの花　律助

動くに費ぬにみひ立葉麦通ゟ　玄喜

粧ふ伊勢しまや峯の跡　　上木　玉斎

椿落て机の上にあはれなり　　久角

ちる花や嵐より[?]のむかし　　羅三

雪峯下てつゝく緑の葉の花　　乙彭

路中名ゝゆうくれのしつかさ　　奥岳

麦くさの香も根来や春の日　　并巾

萬代や浮草のかゝる岸　　伝澄　常磨

鶯の帰る方のまへや庵の松　　以石

不二の嶺見えて海となる扇の風　　沈鯨

梅咲て見えて冬の[?]の妖　　渭門

擬宝珠や峨眉の影しらせ船上　　雲嶺

山路を行あへしる萩の花　　雲遊

夏すこしかゝる人帰りや岸角力　　凌霜

秋風に吹るゝ雁のかゝる柳蔭　　鳥扇

蓮の葉の水鶏の卯月　　之和

初霜や芦のうつきし根数短　　其孝

凩の暁や梢のこりて松の花　青蘿

世の中ハ新らしき春の色鏡かな　契雨

明る静風のさゝ波や水のゆかり　与丸

見し折一輪つゝの咲しハの花　芥来

雪の梅や見ん上る野に花のかほ　菊雉

咲時の余韻ひくや菜の花　蝶居

行く人の明るき霞にて露ハ　物外

起て見る見るゝや初暦　七十又　良秋

茶業の笑ひ声の扇の車かな　雄自

梅の香へ敷きさゝなりけり花の朝　鼎仙

大空よりつゝと揚る雲雀この声　篤継

雲の達磨分て住置ハ無一物　思一

水中その暖の小結ぶ　支笑

口のまゝ駅の春なや初暦　桃谷

蹄にもしみ渡る鶯くるゝ　好雉

倭行の隣より出て花の道　蘭朱

古川の水ハ見すし帰り花　信濃 雨足

秋たぬしや背戸田の真菰刈　湖堂

おのか持つ名ハ蝶なれとも二つ白　雉丸

山科や茶つみ時分の梅の花　一潮

花にきても茶坊の庵や夜の月　蜜生

菜の花の散かゝる法師の棒にかれ　揶起

出来秋や湊ハ明けしのさしかへり　湖面

人も照り伸る戦はまた走り　本多 笠水

春の雲山家はきたる噂つゝむ　淡雲

噂こそうれしや寒の雪中に花　伏見 米花

二つ三つ冬の菫も秋深し　北鳳

冬の夜やこたつも寝寂の蝶　古棠

畑に花の雲秋れし柳の影　雲丸

雲雀帰り野菜畑の雪の付花　みちよ女

梅遅くなく二夜の月田の枝の花　菊室

芝助や行く帰りの花の人　乱儀

来婦くの筥にむくや福寿草　城下 麦史

夕ゐもこほるゝ姿りや鶯生　自鳴

唄ふ丈嬖き向ふ河の梅の花　寿喜

巣ごもる雲を巻て行八聲ふ流水に　桂山

此の雲雉子の聲に山閑かなり　其東

蘭麦や紫上ふる晴しき雲　禾雄

中ゝ見んや昼はえ弱き隣の咲　素居

耳の古き松咲き夕には　鷺城

市中

兄ゆゑしく三秋咲き哥の花に　兄外

夕むらちるに雲ゆく夕立　古棠

髪見船うち着るこのうゑ帆を揚て　外

続て鳴しぬよ以枝て飯時　棠

白やしくと杉の名もよ残る月　外

杜れる竹の声よゝ飛つゝ　棠

新緑の露青き若葉生鰹　冬

ふと思ふ鹿瘡のなぐさめ中え　棠

余所に明けの名残を惜しさ主婦中　冬

峰のきり結ぶ作り化粧場　棠

冬向ハ傾き申くまとめし地　冬

雲は冴まりの寒き立つ旅　棠

二ノ切の為を書をかくる襖越し　冬

おのれ思案へ立つて吸売　棠

出高の絹算用をあわせとなる　冬

つくゝ由来は津の川口　棠

ある日の打よいにかゝる也の中　冬

吉葉婦らしく嫁の着て出る　棠

人先へ出しく用をのべ畑の収穫　冬

来る割茶漏るゝ影を捧げ入るなり　冬

讃さしの本ゆかしけるに残れ　棠

手をとる母も伊豆の名所　冬

温泉めぐりも連のよろしさハ両吟　崇
微酔に明らむ瞳る赤玉　孫
うの花を好書きぬる諸生狩屋　崇
拂ふ鐘のあまる虫出し　孫
細目に耳ふさぐハ赤ら顔戯れ　崇
悟拿しての綾絶無る　孫
自見草儀に傾き合ふ八　崇
歌材きりの角力ゆゑる玉　孫

傘さ無あた露の野末涼し　崇
生まれ通しくて来に乗ふ　孫
庵に思ひて涙ハ涙のゆかりたり　崇
紙鋏書を書ハ物くれ数　孫
為に嘩務ハ定に悩ゆる　崇
一文菓子の露土平は世　孫

志らし封ある梅よ近きの他人ぶ　又介

金室の鐘讃志まる数く　一丘

小輝舞干鱈を棒よ傳しるて　介

驚鶴屋仲間のめ見も傷多り　丘

又も端祢のちとて抱る自之粉き　介

萩ㇾ萩ㇾちるふ上ハ風　丘

おちこと眠きまける鋳藥　介

出るをいつときやまぬ秋海棠　丘

無佗津の游泳しるて由るゑ　介

生きなきめくと点ハ汐や蚊　丘

あやまると赤東旅多年　介

云まほ残荷の面まる坂井　丘

霜越しの鑓鉾をなま袁仕舞　介

出演まくりの非寒光ま行　丘

大汗にありくぬくふ　乳鐘伴　分
歩れ出しうる　材木のうへ　山
茶もかみきさるをありて吹日　分
隣の咄の耿　つまりて西窓　山
菊餅の鼻を摺くる　深よう　〃
画てかゝまゐる岐阜の友達　分
知らぬ浄瑠璃あらふうより徳兵　山
花なさとこそ小間ものゝ銘　分

嗅の声が乙よ気乙に嫡さ里志し　山
鶏に嘩ぬよ　き燃しの西　分
十面の醍よ持つ　かる小路さし　山
家ま浅きに篝人々よ　めでる　分
押り荷にちつて雲よ峠　ふさき　山
志園の哉　むかの猪きゝつ　分
葉内よ大かな生えて月を見えて　なる　山
穂をさくて店の壺鬱きさるる　分

夏きるの汐干よ柳は若かな　広
盛りハかりまよう峯る十念　分
は挂くる吹井の水にとくしやせ　広
調らぬりしきハ蜆蝶の秋　分
出嫌ひの塩無なしぬ松白和　広
樊減ゆかのしきさ出で牢歳　分

季固立春

咲しの板や喜ふ色えらし蝶の君　出羽 浅陽
白の行くる初畑あし鉢の花ゆ　素山
西月や化粧して来ぬ物のしるひ　鷺園
蒔き誰て戻す水に来し船まち　泉石
志もらるハ滝水まし梟有面　扇久
小畑くして居に遊しき浮面の自　秋自
宗もりやき挂ようや動き志めぶ　芝梅

貧婦さへ喜ぶ先やほろし棟の雪　江東

踏おる縁の何ゆく紀ゝのや葉神ぬ　碧水

眠りゆく山を翠やまゝ秋　柳雨

松の根は水もまきし出る蕗の薹　風柳

ちらりくと雲も留ありし東諸市　貴閏

水の輪のさゝ波浮きめり鳴　鳥宜

稲積や猫も此稲の中枕もと　梅甫

團炉裏のかゝる祠や精進し　静風

菊の曙よ菊神る江の月の秋　湖南

秋は欅の江かけ木きの蛙去ゝ　六有

梅のうちは請東方の咲ゝの咲　市聰

伐て初への花ゆるの杜若　田吹

時雨宇治の茶母ふ見るの月　西湖

藤ちるや柳際隣て夜の花　雀樹

眠さまのよ出て夜菊の小　羽林

寝し明よ近き久しゝや茎の雪　仙一

ゆふしのを張合まろつ汐田のあれ　出羽　桂儞

松島の雄島ハ富山観音に詣うて
此夜ハ寂しき宿をあまりに詣て

本しき詣山にとゞめて松の月　井雄

こゝろ目やいつくしくある松のましめ　オク　為代女

藪かしや真白にともゝ梅柳　路之

さそひ行ふて買ちつしる初松魚　乙こう　宣蓑

新米のよみ千々とりし出来ぬ　其堂

秋の今の名の萩ちり稲の葉　紫雛

けふ篇名や七夕兄弟八七をかしき　一の耕

声ちるや蓮の葉あらひ鳴ふし　傳志

風やむ野ハ蛍くるも水明り　文峯

盆月の猿に踊見しまゝ森に　天窟

額みちかしやくる春もおかし茶蕃　孫柳

龍のよる嫁さへ河辺の菜葉に　富山

藁人形ハ二重女数の也夕涼し　会津　松園

花ちらんや名もなき雨に揩出す　安山

升まつ籠掛かし春の雪　東都 蜀丸
白きも壽人壽き碓この戸　粟生
東風吹て出てけり霞の門　旭洋
鶯が鳴し出る海の中かりや時鳥　魚露
ちらんほりと見てみれる遊むか来かれ　碓山
柳海き篠屑のうゝの淡さゝ乳　如山
黄昏や花さき降る出流しかな　一紙

陽炎を嫌し筆を出る乙鳥かな　東谷
二月中旬梅ハ郊しや寒く　季东
流るゝハ清の若葉の禁門　錦山
井水より菜花を取る流出かな　一儁
立なる人ハ花見ぬ十ゝ蒲　錦昔
鸚鵡盈を休まゝ
便りめゝ手綱かゝる丘蛙かな　吐一
垣の中に水きこのうへの椿ゝの花　松前エサシ 一円

牡丹好く葉まで人の賢き志けし　松前ハコダテ 蕙玉

梅の香も吹かれてや秋の和　徐蓮

さくらなる庵もつの浪鶴ゆゑ　讃下 旭

我門を訪ねる浪も御神の丸　信濃 呂風

似合しや茶棗畫る小松原　芥柵

七夕や何野蟹つ筆を留るの家　此濱

山しくや秋茄子實の熱しなる　西鳴

塔清く一眺つみ青田への秋　宵翠

氣爰の宿やさしかれは小半時　越中 老園

秋里に夜半の家ひらきて安らふ水　越文支 二の宮

見る月やかきる夜義水おのつからの　帯白

團扇哉や正月きぬる鎌倉　加賀 柳壺

雲のあらし夕山巡りのまもなし　鳩程

無傷なる梅屋利のや雛の山　文自

鶯や春の名は春ふつの浪　硯鍋

咲く山桜や春のあらしに梅の波　杉生 霽谷

竹山の静まりかへるや秋の空　林雪　竹舟

松風が耳より聞くも初時雨　松溪

きくの香に偲びて出る初汐　梅村

万所の戦きなしや二日月　雪朴

蝶鳥の訪れまれや妻社自　成方　也囲

稲葉より山も風から出来尽し　飛保　素毛

白露の霧も雲右に散りし籠の底　紀伊　秦丘

木の葉から下も出頭り山の里　阿波　字素

以つ聞くも我より先や篭の音　半芳

きくの香の新しの流しときりけれ　素香

あらむきを忍しらの稼や茶の風　永田

書ハ春も戦のまゝに流れ妻の自　土佐　ゝきゝ

梅より今や咲きものまゝ合ひの香　雪芳

拝見や雲も居きしきて稲の秋　源哉

泄葉に空や板立し後ろの居　識香

捨てゝのも跡より見持ちに柳のみ　半芳　松剛

河ありて雲雀落る津の小舟かな　（奥州）耕白

遠山や暮のなかに眠くしまの雲　廿一

川越りハ〻ん古橋く水にうり　（江戸）破笑

根に鳥る雲ハ消ゆる梅あり　静白

伐られても見るものの牡丹かな　澄白

窓の虫雲帰りて夜に鳴き　茶光

燦しき人の捨てる杖かな　昂堂

田の川に見え色紙や出歩の春　石居

物妖や寒き径の上　雪雛

上寿の接待帰りや風の春　思楽

舞遊びて茶の咲きん桜かな　友識

白紙ちるて念仏白木檀　素民

里ありハ仏國も寒し法事　夢々

花のまくれも田し墨かな　斉松

蛍のまさに夫婦のつもり燈りかな　志茶喬

底の芭ハ翌となりて梅かゝり　大富

閣子合の名ハ立仙なり立角力　二条

稿門へ来る春の君ゟ稲荷小　寛路

伸あそ鶯ハ雲の生ぬるる朧　柳枝

若水や一度下も花ゆ郷とし　谿也

孫売ハうれしさの隣に鶴　濤水

出代の手拭愚も売ありこの花　東岡

初嶋や晴れの寒も隣の重　万舟

たゞしゆの長き翠の婚ゐるゝ清浄　里木

生駒とさめもふ山花や合歓の花　之糸

刈菜もついちにも門の男の婚　菊成

秋あかの萩も平かまの文　万由女

名月や畑家老ぬし海の上　嵩山

茗耕や盤ものさしまる山の文　弘成

暮しさのゆくしの川とくのきりくを　酒雄

たのうくしき庵の冬ぬ也のてる隣　苔山

踏川路上やむらさきまとふ流　小雪
ぬれ衣やさらにやつれて落葉哉　尚我
甲斐や大黒柳も宇免の花　巣甫
草木のつゝ青むにまかせ秋の空　錦繍女
嬉しさのつゝ郡飯あつる涼水かな　卓郎
常にハ花のなかよき梅姿哉　雲泉
草敷居や秋ハ錦の欄干哉　泉謙
出る山桜を枕わしきたるまゝ流　自雄

何気なき紅の鐘つきわたり納涼　樗面
身をよせて夕ぐれハ涼しき程に　来将
打くしき蘇生るや涼しき去　不染
朝風のきわる赤るや梅の花　雲曉
継秋や扇へ陣ぎハ風呂も紅葉　波躋
濡るゝ乃明くるをまつ蜀魂　草友
初ゝ袖を雲よりつゝ小松かの風　貴文
何事も鳴きうるさき蟋蟀の往来かな　素水

生海苔や赤く新たき屋の内　蒙甫

咲春の跡へさいまる牡丹の花　雪年

ふ枯れや袖より貼の炊たき露　花年

あつ白や中の根くのきぬる時鳥　越之

きくく花色や股の傍りすくおりれ　乙雄

蔦もうちもやまのつくくしと梅の花　北露

森くとつし行さ物や葉至出　四端

景の時猪の着さや世は西き　寿載

秋くの中象も之照蝸牛　文彦

藻の花の芽出の男は流れさき　氷壺

雲屋をあふさら峯の書も然小江　五桂

あらもや清ちき荒尾の小行蝶　貫年

油え来や柿の葉も飛びさまく　宇山

夢行をあま浮かく四月の花　きさ雅

草津よりつとさくの荻の声　米暁

麦秋や併しき包むる枝のくら　新甫

白雲去後色松のまだむかしのまゝに　東華

此頃も土の中より枝を知る　素竹

鮎魚のまはしにやまちがへる　茶菴

遠近の市に立たる法のゝり　松白

年ならべ月をつれる秋晩に　甘棠

人は旅で出立たるは春のまゝなり　甘志

竹にむしりたるわの自秋の多　士芽

初もほのかに耳にかゝる思ひ　乕笑

扇取るまでや出がけの油小旅の花　春游

珍しさの山がれ立ちたる　俳和

君まち待居は自も晴てる　五休

ささら取る海老の俵さの花　硯帽

時雨の気は様も取りに逢ふ　千芳

福わらや居のふゆまだ見たり　鶯宝

雨垂に峰の鷹もしかり　幽止

時の間しきて清水に　由橋

静さの白ハ野分し郭公　舜香

上ハ風まかせて萩の下葉ハゆれ　沾若女

朱練なくやほしきまくし猫の恋　芳草

水つきて春くらまき柳かな　文昇

豆の葉乱れてるて黄なる蝶かな　荷山

あろ鵄ハ鳴尽て日まし萩の花　史蒙

てらして千もち縫を縄紙くし檪の花　世翠

月らるかまきや雲の為に松まつし　峡支

猫啼や洗ぎのもの水に春のひ　熊谷

風呂まとめくらいの出し行るる柳の水　乙五

居隅ハ水あとのもやたる秋まか　一の房

うき世数岸の菊のつまなくのうれ　又々

多数の人針ぬ茶吹まきの　素瓢

冬枯に緑色生みの雛ハの欲　ささ雄

赤くしめる画題ならまえの方に　鳴水

座この糸わや菊くづまる花の影　葎露

町苗のよきハ花ふ捨松かな　巌水

湖の山乾く海芒ハつくし哉　世譽

自らなる声あ手を梅の花　衛之

句の松よ柳を見て郭公　菊甫

知り顔の果ハ浮名の中なり　木和

中ほどの暑れ花栽ちや春の雨　呂臼

探孫の白芥子笑や月の秋　芳泉

以外も花の千鳥や花あかき　萱廣

小流の水と綾衣き梅の曲　以吾

誰知るも飛ふ花つくし清水哉　时喜

いつくなる影の葉ふ盛のより　苔龍

蛙山と都りの月衛や加さ山　姑山

かゝつちの碑の頃かゝ阿る志ある
石町の俳名をしる至根のり碑屋

かる春の雨つきしや春雑雷　見外

石町の俳名に盛つる事阿ほる余あり奴さる事
ふるひ四地の判者とよひ樹を採る人あるを世今に至り

見くもしや睛梅るを先きまして、

追加

咲出来て都のしらべや花さかる　江戸 かつら

月のかけ岬ハ暮て帆しろし　安房 兵雲

傾城をとりつく蔵も角力取　菱潭

名月や萬國橋の人通り　武蔵 梅巣

草枕やめくりしくさ々秋　正風

黒かみ能古風を捨ぬ姿かな　丹雪

稲妻やちよふけて見え追の軒の端　文州

身につけし文ものゝ西瓜哉　柳枝

見かけ此男勢き出まかせ　中安 如雀

野にかけの葉に涼しさけり　東陵

尼寺や鍵をかけしる咲木槿　鼎湖

菊の花やふに咲ける秋の錦かな　素来

眼さまし池を巡るや蓮の花　青冰

露霜や蝗の足も赤る　群雀

余寒からんかりの咲みかけ画の梅　冰芝

嘩しあての声や遠いのし汐時雨　甲斐　雲升

水仙の神は黒きに咲にけり　升丸

冬こもり尾張に興る夜やふの自　徽琳

霽きき黒は冬こそや郭公　玉泉

安堵して降よ帰りて花の江　竹外

ちる花に入しる吹きらし遊山船　信濃　喜堂

三日出てつゐの年中の浅茅かな　楚山

鶯しや門によりそふ注連の影　槐寿

鴈さしし里用足してや来る事元来　喜壷

千鳥ふしにより菊見さりし霄の雪　一保

丹よかめし川やかきりしとき　甘陵

清蘭ま水はえ奴社のよりしぬ　大和　芳一

三ヶ月や露もて見る屑を志し　尾張　二路

見え云は温泉の湯を山や五月晴　美濃　石高

山寺や聞もかさる柿の葉散らぬ　清源

うらうらの春や我もこれのし奴船に遊ぶ　オク　松陽

旅笠をこゝの上総や冬の杖　吟外

秋の関に與へる色あり袖袷　石史

春さんや梅耳よりきき面影香　来足

翠あふしろ兄出るの声の寄月　下総　一の僊

完を出る燈をこもり耽きたる　非面

春の森や兄れ水のまたる庭　常陸　希水

梅咲て隣の兄えて古の声　上毛　楸当

自由なる山れ来ふや落る雁　梅外

よき海色のよくえ梅柳　見外

咲きそて隣のきめる夕东風　常松

旅蓬青の窓も空あけ春を秋を　外

世写咄しきしをとハ気たる　松

自色の空きまたつむ輪漁　外

帰る乙鳥は伸えてちらし　松

手つくりの柚味噌を縁よる御客　外
居まかりける国婚をむかへ　松
世墳蟻ハ夜より名の住なく　外
落葉掃るゝ寅刻起きる　松
夕霧借て小さうハ出來ぬ咲掛ひ　外
秋山綾雲の逃の夜濕拿縁　松
吹かへりてまた縁うしろ手の路　外
あはれ如し帰りて菜豆出しなく　松

蕨茎を住なりし津幸近々見え　外
諒ハ名申出し本来もたま　松
面影家の繋ぎ鍋きる只かくり　外
多く何とかなく鐘ハ今生空　松
露のうき世や　移ひ末まる門の端　紀伊　切句
黄鳥や耳の毛乱るゝ飯のまま　武江　渓畜

戸もさゝて寐る夜ハ深き秋の月　見外
梓よありし峰つゝき鳥　杉夕
鮎米よ入津勝ふ船来る　ゑふ古
其傍よ跡めるかく縫　外
晴きし姫ハ時雨のこ行遊し　夕
時雨ちらし走るなかし出犬　古

近江のなし女賞譲をたてる哉　外
魚まむつゝ入寒の法法　夕
住文の赴くと蘿の子に漆より　古
大国も河ましあし女畢まる　外
庭の樹も末飛る浮蝶の峰こえ　夕
畷かうく餅を売開しを峰ふ　古
こ寂さめよなつきりえさる月の夜　外
深まへ出並た秋さき紅　夕

鶯啼てまた塒にもとる住ゐ哉　宇

終の雨まだ数並ぶ窓の燈　外

燈の下に梅ちる床のきさはしに　多

いつの間に出る光に寒き松　吉

宵月や梅に精進のはなし哉　雲水 尾正

江戸に至りて菜の花咲し池の端　松路

嫁入しと一葉あまき女草の上　弘英

面白の春薔薇花下や鉤小船　心星

落ちて地を這ふ蘇りし哉　見外

旅立ちの雁の流しの際に残し　星

角つの桜葉を散らす哉　外

鶏乗せし角の後身に立ち合　星

露のつまきしむ　雲木居　外

ヲ 来るほとの人は誉けり種熟　星

ハ 申刻ゟ鳴戸は酒の暢まる　外

様つまて呼ひ出す姫の名　星

黄野せかりて小町と自らか　外

手の肉餅来るハ安き程か福より　星

雲の隣のちらき花つく　外

ウ二 ○ 雲雀は出るより犬の尾を拂ひて　星

博奕崩盛の仲間わかれける　外

ウ三 行劔らの花やら蓄る藪の外　星

松岸宮中の御殿つ空し　外

華の我むさし野の膨らむましし　星

十一 ○ 子は練さうさ拂ひて返事乙る　外

破星寺の修行は責ハ人任せ　、

門中きらく豆の奴出すの星保　星

被年も奈志は息子の手車なり　外

● 春のらく門まゆは奈し奴なり云　星

湧よりの手織揺て浮てひ之　外
セウド忽ち傳はんとしの無　星
書ものゝ中よ無きうつゝより　外
香ひは千とせ吹る陰の華の盃　星
浮し人の船は踏て渡る伸呂　外
自代ぞさ山の姫とある　星
志のひ嘉よ吹く籟笛は寂莫とき　外
薄の葉枝は遠まくふ垣　星

走つくめ鈷溜に走しめる宮合刹　外
表アの岬に鉄碇を沈め　星
仕合と面の章の好き妻角力　外
よそ見揮陰のよろしく山家　星
南かは晴る霜にあきたり数赤　外
入らぬ分よ柾の捆引　星

三囲社頭

田の畦も馬に踏まれし菜　見外

長閑に咲て行く所は[illegible]　現娼

春なしの宮目立汐も蹴ちらして　瓜暁

[illegible]遠く[illegible]葉散る[illegible]　外

湯上りの汗拭ふ[illegible]松扇　娼

手をあらふ[illegible]因縁の床つるき　暁

法談の[illegible]への読業　外

[illegible]にそう[illegible]寝々　娼

近道ハ洲[illegible]竹を植え垣枯らし　暁

出村[illegible]の[illegible]つらひ　外

[illegible]天[illegible]葉[illegible]　娼

[illegible]になれや[illegible]松　暁

雲の[illegible]つる[illegible]出代る番所　外

枝に鎚[illegible]よく遊ぶ物語　娼

橘の色つきは秋社くら空　暁

袖は表のさし込む夜なり立　外

茶盞をのれに猪子社神楽り　蝸

弥生八百年の冬く薮うら　暁

雪を盛る土器や中の子を雀番　外

冬の宮殿の方の二日屏に来て　蝸

銭を持て履を肩にする物を持　暁

足に付と千日洗馬の逗留　外

かしこまる女按摩のおもしろき　蝸

おもひ出すつくしの等頭もなくとき　暁

東雲の捨らし見申す札の辻　外

黙りきる要きれおもしし一番　蝸

又薬を帰きりる津也の唐机　暁

鰹のうちる八勤く鈴挑　外

山ぐのくゝおのりよりは自の岩　蝸

新しき春より寒し江戸酒　暁

仲買の手鰡を探る稲の穂に　尓

名乗も見捨て生きる世中　露

涼しさのうらに一里涼すむ秋の風　曉

隠の戸さしそ情もなき宵　尓

来しくの細鉄を茶を笑ふ是て　蛸

まるよ車のまゝ芽張る生垣　曉

水仙は陵嶺へ寄る数本と寺　見外

いつしかは藤色の様子野宮　耕雨

庭掃除之諸事をかへて席まくら　外

鶏まっさかり女見ての笑云　雨

絹の裏小袖書の文段ようにの里　外

中積のいかにと人に争ふ　雨

結箒よ子らは集まる事つる也　外

る菊をよそ中の姫もまたに足　由

遠山は二夜中に傍雪の面にこぼる　外

嵐吹くまぬる紅葉散小蝶落　由

猿の声やる影の音出しきれ　外

情多き時雨は八つまぬ猫まかりこぬ　由

菖蒲湯の杢にしも猿の鬢の月　外

水はれて又打折し鴫の声つる　由

神楽堂の穿さに限らぬ人つくる　外

白砂にきしし寿のとりつき　由

茶ある日よ寿ことと惣角やらぬえ　外

古き事にしきめしに色に茶　由

秋近く寂しき松の声のきよ秋　オク光石

陰松やきりる稚の秋ふく、　千涼

蚤おらし衾をしたり菊の花　江戸 芝自

茸狩や何處とも湛たる松茸木　梅自

八月や浦のまさごに鰯雲　さや古

志ら露や拾ひ尽しても草の上　不芳

霄まで歩く旅の朝の峰も秋なり　如白

名月や湖出ておもふ屏風引き　瑚徳

桔梗や甲斐千本の二百三百　住吉 露峨

蛇の花にかくるや自然露　摂津 古麦

菊咲くや新たに出し海の旅　上総 藍雪

乞食にも身のあまりある村時雨　閑代女

千葉に夕日添ひて秋も暮ぬ　梅吟

秋立や一ツ葉にも古浦秋空なり　菊路

さまざまに咲く霄越しの秋の空　菜雪

志らぬ間や隠居屋敷の垣根まで　好々

借ふ家は本より原中の田畑　有方

きゝつけて尾上あられも空の月　上野 睦鴎

志ぐるゝや白との水一方海の家　倍年

垣ねの人なつかしむ山河に時雨かな　稲風

歸るさに茶屋の軒にし旅時雨　洗耳

山里へ運ぶ雲の音の流れゆく　曉谷

時雨るゝや鷄の羽婦に橋の先　桃園

ゆく河の流れに袖濡らす時雨かな　一笑

夫としても雲に声を遣して立別る　松雄

紅葉刈る田畑の稲も淋しゝ時雨　秋 章之

千鳥鳴く浦廣々と時雨かな　義護

吹き殘る柿の葉ちらす時雨かな　梅谷

田の鴨の蒲もしなへて時雨空　豊永

笠もなく浮世の旅をしくれに　一璘

新米や都のいのちの手の儀數　雅孝

宿かるる連れ中のあはれに夕時雨　稚里

千の山野の枝々に荒れに　千代女

むらさきに葦穂摘の露すゞり　上総 禅雪

稲妻の後嬉し清水の影寒き　鵜方

河豈しく見出すさ河の鳥自在　池柳

葉のなんと積るしるや禅む　青蘋

小深に夕栄引や草のさま　安房 慈友

大暮の婦しくのひと秋近し　梅圭

枝葛に鳥も帰る夜のうち　麓松

打水もこのまゝなる庵や星も　楳山

村しくの雨貴見出るや稲の出来　上毛 一巴

出しに無き入りの山や三日の月　椿斎

米深まりや深く赤のまゝ水の泡　山口 翠岬

悪きるや露さへ姑まゐ磯の空　車由

ものの音の末くさ鵆も鳴ける　越中 連水

紡秋の風の来るもの物のあひ　伊勢 宋英

寄せ中傍升に鍋さしはさ海　近江 玉指

杖揺る手のこゝろさうゝきの秋　城下 帝隆

待宵や寒さも河の秋をはし　木曽 素茂

風にちる蝋燭に粧ふ桜葉かな　妹戸 松声

花ぞ菊のかをりのひ色に白秋かな　江戸 壺外

木つゝきや楊ゆのかた張やしき　菊楽

寄る縁の集つくれや桐一葉　也風

農業の時に手に菊を仕舞ひけり　仗芳

来る年の暮を来たしめや鶺鴒　少年 ?甫

都しらぬや越たる夕の河を九折　ミナノ 省我

秋も都しらず春の里の納帳　梅丘

揚越して楊のもとや芽張時　ムサシ 桃以

芋葉の中や世間のすゝ浜に成り　カヒ 楽水

さぞ似し露を其る身の納豆汁　江戸 吾人 方以

時雨来てそろまでつるし入頃かな　上総 大模

挿し木梅は新に路見えし　千代女

鶺鴒のちる道しゆくや雲の空　一醉

鴨一羽青さをまさる小田の水　上総 希聲

秋汐や満汐とくる杖の音　雑里

鳥影も八葉て暮る旅の夜のあらし　近江 久武

蝶算や是で数召見八雲の一ツ　江戸 綱

萬象やしめ法蓮も又冬の暮　福鮎

猿の出て寶よりよき寒の鐘かな　寸里

雨降りて西より出の晴る月の影　平山